

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第55回

万葉の川心

いまだ国を勸へぬ相聞往来の歌

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

(巻第十四 三三三九番歌)

崩岸の上に駒をつなぎて危ほかと

人妻児ろを息にわがする

一生をかける恋。何かどうしようもない、結ばれない定めがそこにあったとしても、貫き通そうとする恋。もしその人に出会わなければ、普通の生活が流れていたのに。なぜ、他の人ではだめなのだろうか。そんなことすら考えられないくらいに、人は突然、恋に落ちる。

崩れた崖の上に、馬をつなぐ。いつまた崩れるとも限らない。足もとの危うさのなか、人妻に恋をしてしまった。その思いは止められず、愛しいあの人を命の綱とする。愚かだと人は言う。噂もやがて立つだろう。自分の周りはずべて敵になるやもしれない。けれど、愛しい人への想いは、すべてを越えていく。

混み合ったスーパールのレジならば、間違はなく少しでも列の短いところに並ぶ。並んでいる間も、他の列と見比べて、速いほうへと並び替えたりもする。電車が来れば、降車駅の階段に一番近い扉から乗る。「合理的に短時間に」を追究して人は進歩してきたのに、「恋」だけは思いの外だ。わざわざ崖っぷちに馬をつながなくてもいいのに。相手に夫がいるのだから、あきらめればいいのに。他にもいい人はたくさんいるのに。なぜ自分のことになるかと、見えなくなるのだろうか。万葉の時代からずっとそれは変わらない。そ

う思うと苦笑いしてしまう。

この歌は、親しい間柄で互いに情を伝え合う「相聞」という分類の歌である。「危ほかと」は、「危うけど」の東国方言で、そのまま万葉集に載っている。

「息」は「生き」と同根であり、「息の緒」という言葉もある。命の綱としてずっとあなたを想っているという、恋を歌うときに使われる表現だ。川を見ていると、いつも思う。向こう岸は、とても近い。目と鼻の先なのに、橋がなければとても遠い。川瀬を渡るなど無謀なことだ。服も濡れる。足もとられる。こんなに近いのに渡れない。川と恋は、いつも隣にいる。天の川の昔から。

歌碑は、埼玉県飯能市の阿須運動公園内にある。公園の名に、「崩岸」が残っている。遊具で子供達のはしゃぎ、グラウンドでは野球に夢中の少年達が走り、川原では桜を見ながら仲間同士がバーベキューを楽しんでいる。歌碑の側のベンチでは、仲よく話す家族の笑い声が、青い空へと溶けていった。

幸せの形は、一つではない。「普通が一番」な人もいるし、どうしようもない恋に「出会ってしまった」人もいる。結婚すれば「普通」になるのだろうか。いやいやまた、出会うかもしれない。恋は突然やってくる。だから隣にいる連れ合いに、心の中でそっと謝る。「また二キロ、太ってごめん。」命綱は、年と共に太くなっている。他の恋は・・・できないようだ。

